或問　WAKUMON　59
No.35,（2019）pp.59-77

王国維と桑原隲藏の『中等東洋史』

陳　琳琳

摘要：現存する王国維の早期の詩作の中で、最も有名なのは『詠史二十首』である。この詩集が言及する時間的広がりは、中国人種の由来から明朝の滅亡までに渡り、その内容の大半は、歴代中国王朝の対外関係に関わっている。考察の結果、『詠史二十首』と日本史学者・桑原隲藏の『中等東洋史』は、創作の契機や詠史の視点、テーマの選択、具体的内容において全体的に内在の関連を持ち、細部においても当時流行の一部の観点に影響された痕跡があることが分かった。また、王国維は、『中等東洋史』を 1899 年に初翻訳した『東洋史要』と 1908 年に再翻訳した『重訳考訂東洋史要』とも大きな関わりを持っている。周知のとおり、『東洋史要』の翻訳者は樊炳清で、その序文を書いたのは王国維であった。考察の果、『重訳考訂東洋史要』の翻訳者も樊炳清で、王国維は補佐的役割を果たしたことが分かった。上述の関連から、日本へ亡命する前、王国維は歴史学を専攻していなかったが、常に国際的に歴史学界の動きと進展を注目していたことが分かる。これも彼は日本についた後、素早く歴史研究に転向できた大きな原因である。

キーワード：王国維『詠史二十首』/桑原隲藏『東洋史要』/樊炳清/『重訳考訂東洋史要』。

『詠史二十首』は王国維の青年時代の作品で、「千秋壮観君知否、黒海東頭望大秦」の 2 句が、雄大な風格と新奇な視点をもって有名である。この詩集は、王国維の生前に公表されることなく、呉宓が編集長を務めた 1928 年 11 月発刊の『学衡』誌第 66 期に初掲載された。編集者は「按右詩二十首，分詠中国全史，議論新奇而正大，為静安先生壮歳所作。集中失收，且従未刊布。本刊輾転得之羅叔言先生許，亟録之以示世人，編者識。」[1]という付記を付け加えた。この付記により、この詩集の出所は羅振玉の収蔵であることが分かる。2009 年発刊の『王国維全集』の記述によると、1980 年代に上海図書館は「高嘯桐友朋書札」中からこの詩集の異版を見つけた。それは、王国維が 1900 年に高嘯桐に郵送した手書き原稿であった。その中、内容が羅振玉の収蔵版と多少異なる詩が数首あった上、注釈も 5 箇所多かった。詩集の最後に、「庚子（1900 年）三月以事留滞武林，病風苦咳，不能読書，輒拈筆詠古，得二十絶句，録呈嘯桐先生正。王国維草」[2]という王国維の説明があった。

王国維の『詠史二十首』について、言及した研究は多いものの、専論は少なかった。しかも、

---

[1] 『王国維詩詞箋注』（筆者王国維、箋注者陳永正）、上海古籍出版社、2011 年 4 月、詩(192 首)、第 2 頁。

[2] 『王国維全集』第十四巻、広東教育出版社 浙江教育出版社、第 617 頁。

その研究も芸術的表現の手法や、初期思想の解析に対するものばかりだった。1984年、譚佛雛氏は「『詠史二十首』与王国維的早期審美観」で、文学理論の視点から解読を行った[3]。『詠史二十首』の手写本が見付かってから、胡逢祥氏は、「王国維『詠史二十首』手写本の文献価値」という文章を書き、詩の中で表された王国維の史学思想の一部について紹介した[4]。この詩集の具体的な作成期日が確定できないことについても、胡氏はその文章の中で比較的に詳しく説明し、自身の考えを述べた。

一、詩を作成した期間

羅振玉の『海寧王忠慤公伝』は王国維の詠史詩について、「公来受学，時予尚未知公。于其同舎生扇頭読公詠史絶句，知為偉器，遂拔之儔類之中，為贍其家，俾力学無内顧之憂。」[5]と記述する。王国維の親友で同窓でもある樊炳清も『王忠慤公事略』で、この事について、「時上虞羅叔言参事振玉設東文学社于上海，延日本藤田博士豊八為教授，公来受学，参事見其詠史詩，大異之，許為大器，力拔之于庸衆之中。」[6]と記述している。

羅と樊の記述によれば、この詩集は1898年頃書かれたものと思われている。譚佛雛氏は東文学社に入る前だろうと考えている。袁英光氏と劉寅生氏は『王国維年譜長編』で、「高嘯桐友朋書札」に基づき、この詩集の作成期日を1900年5月と記した。『王国維全集』の編集者である胡逢祥氏の「王国維『詠史二十首』手写本の文献価値」における観点は『王国維全集』と同じであり、1898年から創作が始まり、1900年まで詩集の形として完成したと考えている。陳永正氏は『王国維詩詞箋注』で、「詩集の第二十首が日本について詠ったことから、詩集は静安が東文学社に入り日本語を習っていた時だと考えられ、即ち1898年3月から6月の間である。」と主張した。

『海寧王忠慤公伝』における羅振玉の記述から、最初、彼は王国維について認識していなかったことが分かる。王国維の詠史詩を読んでから、羅は王国維に注目し、王が学問に専念できるよう、その家族の生活費を提供し始めたのである。王国維と許默斎の通信や、王の父親の日記から、王国維は1898年2月(戊戌年の正月二十六日[7])の初めに実務新聞社に入社し、2月24日(農暦の二月六日[8])に東文学社に入って日本語を習い始めたことが分かる。仕事があるため、日本語

---

[3] 譚佛雛「“咏史二十首”与王国維的早期審美観」,『揚州師院学報』(社会科学版) 1984年第4期, 1-6頁。

[4] 胡逢祥「王國維《詠史二十首》手寫本的文獻価値」、大連図書館-ホームページ- http://www.dl-library.net.cn/publication/pub_content.php?id=255

[5]『海寧王忠慤公伝』(筆者羅振玉)、『追憶王国維』(編集者陳平原)、三聯書店、第6頁。

[6]『王忠慤公事略』(筆者樊炳清)、『追憶王国維』(編集者陳平原)、三聯書店、第10頁。

[7]『王国維年譜長編』(筆者袁英光・劉寅生)、天津人民出版社、第13頁。

[8] 『王国維全集』第十五巻、広東教育出版社 浙江教育出版社、第1-23頁(徐默斎への手紙)

の学習は毎日午後 3 時間だけであった。入門の時に束脩を 10 元納めた。最初は生徒は 6 人しかいなかった。6 月中旬(農暦の四月中旬[9])になって、生徒を 2 組再募集した。使用した教科書は、日本の小学校で通用されるものが計 7 冊だった。王国維の話によると、読書の時間が足りなかったため、クラスメイト 6 人の中で自分の成績が一番悪かったという。彼は 6 月末の手紙で、自分にもっと日本語の練習をさせるために、日本語新聞の翻訳者として新聞社で働けるよう、藤田豊八は汪康年に推薦してくれたと記すが、7 月 18 日(五月末日[10])、その結果を待たずに、王国維は足の病気で上海から海寧に帰り、11 月の下旬になってようやく上海に戻った。上述のように、2 月末から 7 月下旬まで、王国維は東文学社で午後の 3 時間だけ、日本語のみ勉強していたが、成績はよくなかった。そして、父親と親友への手紙では羅振玉について言及していなかったことから、この時の彼は、まだ羅振玉に注目されていないことが分かる。更に、7 月下旬から 11 月末、病気で海寧に居たため、コンタクトすることはいっそう不可能だった。この年の 6 月(戊戌年の四月[11])に、王国維は『雑詩三首』を創作した。その主な内容は自分の不遇を感慨するもので、情緒の基調も『詠史二十首』のそれとは全く違う。

1898 年 11 月下旬、王国維が上海に戻った時、戊戌の変法は既に失敗に終わっていた。『実務報』新聞社は閉鎖され、羅振玉と蒋斧が経営する『農報』新聞社も資金援助を失った。東文学社では、生徒達は四散し、運営費も集められなくなった。後に名を上げた王国維、瀋紘、樊炳清は、いずれも当時学校に留まった生徒だったと、羅振玉は『集蓼篇』に記述している。王の父親の日記によると、上海に戻った後、王国維は東文学社に残るかどうか大変悩んでいたようだ。生計を立てるために彼は新聞社での仕事を続けたかった。当時、許默斎は既に上海に戻り、『昌言報』新聞社で働いていた。生活苦に強いられ、「ほぼ無一文になった」[12]王国維は、日本語の翻訳者として『日報』新聞社に推薦して欲しいと、11 月下旬の手紙で許氏に願ったが、返事はなかった。そのため、王国維は引き続き東文学社に留まり、樊と瀋と『農報』新聞社で翻訳を務めることにした。そのため『農報』は発行し続けることができ、三人の学費も免除された。この時、王国維は既に羅振玉と対面したが、特別待遇を得ることはなかった。学費を免除されたのも、『農報』で翻訳や社論の仕事を務めているためで、同じく生活苦で学費を免除された瀋と樊と同じ待遇だった。1899 年の秋になってから、東文学社の情況は好転し、生徒は徐々に多くなり、王国維は学監に任命された。同じ時期に、日本人田岡嶺雲が教習として東文学社に入り、王国維はその影響を受けて英語と西洋哲学を勉強し始めた。王国維は間もなく学監を辞任したが、羅振玉はずっと彼に月俸を払っていた。この時になって、王国維ははじめて安定した収入というものを

---

[9] 同上。

[10] 同上。

[11] 『王国維詩詞箋注』(筆者陳永正)、上海古籍出版社、第 22 頁。

[12]『王国維全集』(筆者王国維)第十五巻、広東教育出版社 浙江教育出版社、第 1-23 頁(徐默斎への手紙)

得た。このことは、王国維が既に羅振玉に一目置かれるようになった証であろう。この羅振玉の態度の変化からすると、彼が王国維と対面したのは1899年の秋頃と推測できる。

『学衡』誌で発表された『詠史二十首』は羅振玉の旧蔵であることから、羅振玉が収蔵したこの詩集はまとまった二十首であり、その内容から、1900年以前の原稿であることが分かる。また、この詩集の格調や情感、視角は統一的で流暢であり、短時間で作成されたものと思われる。では、どのようなきっかけで、王国維はこの期間において歴史題材に対する興味が大いに湧き、詠史詩を二十首も創作しただろうか？周知のように、王国維が上海に来たのは、新学に深い興味を持ったからであり、できるだけ新しい知識に触れようとしていたはずだ。だが、1898年の中国では純西洋学術の訳本はなかなか目にすることができず、科学的に編集された中国の歴史編纂物はなおさら無理だった。これも中国で近代学制が実施されてからも、歴史教科書は日本の歴史教科書に基づいて編集することしかできない原因だった。新学伝来の初期、主に政治や経済、科学技術類の知識が注目され、訳本や新聞もこの類の内容に重きが置かれていた。一方、純学術的な性質を持つ哲学や歴史分野の書物は、富国の役割がないため、重要視されなかった。だが、日本ではそうではなかった。西洋哲学や歴史は、東京帝国大学では学科として成立していた。そのため、東大卒の藤田豊八は、この類の書物をかなり持っていた。1898年11月には、王国維は完全に東文学社に溶け込んでいた。時期と王国維の自序の内容から見ると、王国維が藤田豊八を通じて西洋と日本の書物に触れ始めたのはこの頃だと考えられる。王国維が英語を習い始めたのは1899年の末だったため、この時の彼には英語の書物が読めなかったはずであり、日本語書物の中で、中国の歴史に関わりを持つものは、1898年3月の末に出版された桑原隲藏の『中等東洋史』しかない。

『中等東洋史』は日本で大きな反響を起こした歴史教科書であり、中国の歴史に対する二十四史以外の考え方が示されている。この本が出版された後、藤田豊八はそれを東文学社の教科書に使用した。具体的な使用期間ははっきりできないが、1898年以降であることは確かである。1899年5月17日(光緒二十五年四月八日[13])から、東文学社出版の学社内部教科書が発行され、歴史学科の教科書に桑原隲藏の『中等東洋史』が含まれていた。この本の翻訳者は樊炳清で、中国語の書名は『東洋史要』である。他にも、那珂通世の『支那通史』と、箕作元八と峯岸米造の『欧羅巴通史』[14]が含まれていた。漢語で編集された那珂通世の『支那通史』は、最初に中国近代学堂で使われた歴史教科書に違いないが、西洋近代史学の方法を参考に編集された『東洋史要』は、中国でいっそう大きな反響を起こし、注目を集めたのは明らかだった。樊炳清の翻訳が終わってから、王国維は藤田豊八の口述した概要に基づいてこの本の序言『東洋史要序』を書

[13]『支那通史』扉ページ(筆者那珂通世)、東文学社出版。扉ページに著作権声明あり、落款所の日付は光緒二十五年四月八日になっているため、東文学社が印刷した教科書シリーズは、この時から次々と出版されていたことが分かる。

[14] 原書名は『西洋史綱』。東文学社により出版される際、王国維が序文を書いた。

き、この本の科学性を称賛し、桑原の書いたこの本の特徴は、「抑我東方諸国相影響之事変不勝枚挙，如釈迦生于印度，其教自支那、朝鮮入日本；漢以攘匈奴而通西域；唐之盛也，西逾葱嶺，南奄交趾支那，以与波斯、大食海路相通；元之成吉思汗兵威震于中央及西方亜細亜，至其子孫，席巻支那、朝鮮，余勢及于日本。又如日本豊臣秀吉，其関係于朝鮮及明之興亡者不少。」[15]といった東方諸国間の繋がりや団体性を重んじたことであると、本の内容を締め括って説明した。そして、これらの史実は王国維の創作した『詠史二十首』の中で数首のテーマになっている。桑原隲藏の『東洋史要』は中国の国史に立脚すると同時に、他民族や他国との影響関係にも注目した。これは、中国歴史の編纂において斬新な視点であり、史実しか列挙せず、その関連性を無視するという従来の史書編纂の形式を打ち破るものであった。

偶然にも、王国維の『詠史二十首』にある系統的、関連的歴史観は『東洋史要』と一致するものである。その序言で王国維の挙げた東方諸国が影響し合う 5 つの史実は、いずれも王国維の『詠史二十首』の中で数首のテーマになっている。王国維が東文学社に居た具体的な期間と様子や、羅振玉との交流を合わせて考えれば、『詠史二十首』は、『東洋史要』の科学的歴史観の啓発を受け、対外関係において弱者の立場にあった清末の現状に刺激を受けた王国維により、1898 年の末から 1899 年 5 月までの間に創作されたと思われる。『東洋史要』の序言の内容を合わせて考えれば、詩集の完成時間は「序言」の後である可能性が大きい。

二、『詠史二十首』[16]と『東洋史要』を対照しての解析

上述のように、それまでの歴史書と比較してみると、『東洋史要』は編集において、西洋歴史学の方法を受け入れ、中国と周辺民族の関係を強調し、各民族の史実の関連性を重んじている。そして、『詠史二十首』のほぼ全篇で、王国維が取った対外の視角はそれと同じであり、しかも、その中の典型的な史実を選り抜いて詩のテーマにしている。故に、二者の視角やテーマ、内容といったものの内在的関連を合わせて分析すれば、『東洋史要』の王国維に与えた影響は一層明瞭に理解できる。

1. 歴史的視角とテーマの選択

『東洋史要』の内容、総論：上古の前(第一章　東洋史の定義と範囲、第二章　地勢、第三章　人種、第四章　時代区分)、上古期：漢族膨脹期(第一篇　周以前、第二篇　周)、中古期：漢族優勢期(第一篇　秦と西漢初期、第二篇　西漢の対外経略、第三篇　西漢末期と東漢初期、第四篇　仏教の

---

[15] 同上、第 3 頁。

[16] この詩集の原文は上海古籍出版社が出版した王国維の本を参照。『王国維詩詞箋注』(箋注者陳永正)、原文は 1928 年 11 月発行の『学衡』第 66 期に掲載され、注釈の内容は 1900 年に手書き原稿を改訂したもの。『王国維全集』で記載された、王国維が 1900 年に高嘯桐に送った手紙に基づく。第十四巻、第 617-620 頁。

東漸、第五篇 東漢末期と三国と西晋、第六篇 五胡十六国と南北朝、第八篇 唐朝の対外経略、第九篇 唐朝の中期と末期)、近古期：蒙古族最盛期(第一篇 契丹と北宋、第二篇 女真と南宋、第三篇 蒙古、第四篇 元と明初、第五篇 元末明初の塞外形勢、第六篇 明の中期と末期)、近世期：欧人東漸期(第一篇 清初期、第二篇 清朝の対外経略、第三篇 英国人東漸、第四篇 中央アジアの形勢、第五篇 太平洋沿岸の形勢)が含まれる(各篇の章についての紹介は省略する)。

この本の枠組みから、多くの篇で中国と周辺民族、国と国との交渉、相互への影響について集中的に述べたことが分かる。例えば、「西漢の対外経略」「仏教の東漸」「五胡十六国と南北朝」「唐朝の対外経略」「元末明初の塞外形勢」「清朝の対外経略」「英国人東漸」「太平洋沿岸の形勢」などで集中的に述べたいるほか、全篇はできるだけ「内外」史実間の政権に関する極意と、相互への影響を重んじている。桑原隲藏の『東洋史要』は、本国の歴史を孤立的に扱い、外族の影響を無視したというそれまでの史書の観点をある程度まで変えたと言える。王国維の『詠史二十首』は同様に、こういう新しい歴史観を取り入れ、ほぼ全篇の詩のテーマは、周辺との関わりに繋がっている。

第一首は種族の起源から書き始め、そもそも漢族の起源は外族の地と現在認識されている西陲にあると表明し、漢族と外族の関連性を述べた。第二・三・四・五首では、遠古神話を歴史のテーマに、伏羲創世、黄帝が蚩尤と苦戦した末の統一、九黎に対する統治、舜帝と禹が三苗族を追放する統一戦争をそれぞれ讃えた。この四首のテーマと同じ内容は、『東洋史要』第二篇第三章の「漢族と他民族の関係並びに周代狄戎族の跋扈[17]」にも見られる。その中で、「上古時代に、最も漢族と揉めていたのは中国交趾族の一部である苗民だった。苗民は漢族よりも早く長江と両湖地域に住み着き、堯舜の時代にその勢力は最盛期を迎えた。九黎族(後の苗族)の首領・蚩尤は、中国の中心部を占拠していたが、その後、漢族が黄河流域を沿って次第に南へ移動して来るに連れ、最後は江南の片隅まで退いた。」[18]などと語ったほか、黄帝の蚩尤殺しや、舜・禹の苗族征伐も語っている。両者はテーマの選択、表現の観点においてほぼ同じである。第三首の「憯憯生存起競争，流伝神話使人驚。銅頭鉄額今安在？始信軒黄苦用兵」にある「生存」「競争」といった言葉から、この詩を創作する時に、王国維は西洋の進化論について既にある程度把握し、古代神話にある黄帝と蚩尤の戦いは正しく「適者生存」「優勝劣敗」という観点の表れと考えていたことが分かる。これは厳復が『天演論』を翻訳した時に注目した問題である。1897 年の末、厳復が翻訳した『天演論』は、『国聞報』新聞に初掲載され、1898 年 4 月に正式出版されて、瞬く間に全国を風靡した。王国維が実務新聞社に入ったのは 2 月で、東文学社に入ったのは 3 月だったが、新聞社や学校という情報の流れが速い場所では、当然すぐこの本を目にすることができた。

---

[17] (日)『中等東洋史』上冊(筆者桑原隲藏、校閲者那珂通世)、正文第 37 頁、大日本図書株式会社発行、明治 31 年(1898 年)3 月 31 日出版。日本国立国会図書館に収蔵。

[18] (日) 『中等東洋史』上冊(筆者桑原隲藏、校閲者那珂通世)、正文第 37-38 頁、大日本図書株式会社発行、明治 31 年(1898 年)3 月 31 日出版。日本国立国会図書館に収蔵。

しかし、王国維の詠史詩では全体的な視点と構想、テーマにおいて『東洋史要』の影響を受けていたが、具体的な認識においては、当時に接触できる他の西洋学術の新しい理論も取り入れていた。

第六首と第七首の詩は、それぞれ「銅刀歳歳戦東欧(ここの「東欧」は、手写本では「西欧」になっている)、石砮年年出挹楼。畢竟中原開化早，已聞鐐鉄貢梁州。」(第一句の後に、「ホメロスは詩の中でよく銅製の兵器を詠っていた。」という注釈がある)と「誰向鈞天聴楽過，秦中自古鬼神多。即今詛楚文猶在，才告巫咸又亜駝。」(手写本の詩の後に、「亞駝者，与亜当（Adam）近，豈秦在西方已聞猶太人之設歟？」という注釈がある)である。一首は、夏朝の時に中国の開化が周辺民族より早かったことを讃えた、もう一首は、秦朝が統一戦争を行う時に外来文化の影響を受けていたことをほのめかしている。具体的内容は、桑原隲藏の本とあまり関係ないが、外来文化の影響と、対外的関連性を重んじる視点は同じだった。どの詩も中国の歴史を表現すると同時に、できるだけ当時中国の歴史に関わる他民族と他国の情報を取り入れていた。王国維は、1900 年 4 月の原稿の中で「銅刀歳歳戦東欧」を「銅刀歳歳戦西欧」に書き直し、西欧詩人ホメロスの詩(即ち「イリアス」と「オデュッセイア」)の中で銅製兵器を詠う内容があると注釈したり、秦楚戦争の時に秦国は楚国に勝つために神霊を祭祀する際、その祭文『詛楚文』の中にある亜駝という神霊の名の発音が亜当(アダム)に近いため、欧洲神話に出てくるユダヤ人の先祖アダムの事まで連想し、「亜駝者，与亜当（Adam）近，豈秦在西方已聞猶太人之設歟？」(当時西の地にあった秦国に、既に西洋神話が伝入され、秦人が言う鬼神亜駝とはアダムのことか？)と第七首で疑問を感じたりした様に、この 2 首の詩を修正し、注釈を付け加えたことで、その詩に表される中国の歴史と西洋諸国の繋がりを探ろうという意向がいっそう強くなったことが見て取れる。1899 年夏以降、王国維は田岡と藤田の所に入門し、正式に英語と哲学を勉強し始めた。1900 年 4 月の原稿の中でこの 2 首の詩が修正と注釈を付け加えられたことからも、王国維は細部に渡って英語と西洋学術の影響を受け始めたことが分かる。

前述のように、王国維は、「東洋史要序」の中で科学的歴史観を説明するために例としてあげた史実を、自分の一部の詠史詩のテーマとして使った。これらの史実も、桑原隲藏の本の中で論述された主な内容であり、東亜諸国と関わりを持っているだけでなく、インドやペルシャ、イスラーム帝国、西亜などの地域にも様々な影響を与えている。例えば、東への仏教伝来を語る第十一首「慧光東照日炎炎，河隴降王正款邊。不是金人先入漢，永平誰證夢中緣？」は、即ち王国維が序文に書いた「如釈迦生于印度，其教自支那、朝鮮入日本」という歴史である。『東洋史要』の中古期第四篇では、専ら漢王朝時代の仏教東伝について、西漢時のインドの様子、大月氏における仏教の盛行、西漢時の西域交通の開拓、大月氏経由の仏教の伝入、東漢時の盛行の開始と白馬寺の創建といった内容を記述した上、「唐朝の対外経略」で、仏教の唐朝における最盛期や、朝鮮と日本への伝入を詳しく記述している。王国維は後の論文でも、しばしば仏教東伝の史実を使い、外来文化の重要性を説き、中国における西洋学術の伝播を推し進めようとした。

第十首と第十二首は、「撝戈大啓漢山河，武帝雄才世詎多。軽騎今朝絶大漠，楼船明日下牂牁。」、「西域縦横盡百城，張陳遠略遜甘英。千秋壯觀君知否？黑海東頭望大秦。」、と漢朝が武力と使者派遣で西域諸国との交通と連絡を整えたことを賛美した。即ち序に書いた「漢以攘匈奴而通西域。」である。その中、「千秋壯観君知否？黑海(波斯湾)東頭望大秦」の2句が、雄大な風格と新奇な視点をもって最も有名である。桑原隲藏は本の中で西域の海上交通を語った時も、「大秦国の富強さを聞いた班超は、その部将甘英を行かせた。大秦はほぼ今日の羅馬に当たる。甘英は安息を経由してペルシャ湾の東側に着き、渡海せずに引き返した。」[19]と書き、視野の広さと訪問ルートの選択において甘英は張騫を越えたことを褒め称えた。実際、広い視野と策略を持つことも、王国維が当時の国と社会に期待を寄せている所だった。

第十七首の「南海商船来大食，西京祆寺建波斯。远人尽有如归乐，知是唐家全盛时。」は、唐朝と周辺諸国との通商繁栄を褒め称えている。即ち「唐之盛也，西逾葱岭，南奄交趾支那，以与波斯、大食海路相通。」である。『東洋史要』にも中古期第八篇「唐朝の対外計略」の全篇で、唐朝の他国と打ち解けた付き合いや包容力を記述した。その第八章「唐代の東西交通貿易」と第九章「外来宗教の東伝と仏教の興隆」の内容は、正しく、「南海商船来大食，西京祆寺建波斯」という、唐朝の包容力を表した王国維の詩の下敷きとなる詳しい史実である。詩集の全体が、各王朝と外国や他民族との関係を重視したように、この詩は唐朝の強盛さを表現するために、その外国や他民族に対する包容力に注目した。作者は、このような包容力こそ、強い国家にあるべき度胸だと考えている。

第十九首の「黑水金山啓霸圖，長驅遠蹠(手写本では「高掌」になっている)世間無。至今碧眼黄須客，猶自驚魂說拔都。」は、ジンギスカンとその子孫の領土開拓を語っている。即ち、「元之成吉思汗兵威震于中央及西方亜細亜，至其子孫，席巻、朝鮮，余勢及于日本」と序文に書いた通りである。『東洋史要』は元朝の歴史を七章に分けて記述しているが、最も長いその第三章には、ジンギスカン、バトゥ、フラグの西征がそれぞれ記述されている。これも元朝の歴史に対する王国維の視点と同じである。それに、王国維はジンギスカンとその子孫の戦上手を賞賛し、民族が異なることで元朝の統一と強盛を差別することはなかった。

第二十首は、「東海人奴(手写本では、「東海人奴」の後に「豊臣秀吉」という注釈がある。)蓋世雄，巻舒八道勢如風。碧蹄倘得擒渠反，大壑何由起蟄龍。」(手写本では、詩の後に「明が朝鮮で敗れたことで、国朝は興起し始めた」という注釈がある)である。この詩は、豊臣秀吉時代の日本が朝鮮と明朝を相手に起こした戦争が、明朝を衰微させ、清朝はそれに乗じて興起したことをテーマにしている。即ち、「又如日本豊臣秀吉，其関係于朝鮮及明之興亡者不少。」と序言で書い

---

[19] 筆者の訳文。原文は(日)『中等東洋史』上冊(筆者桑原隲藏、校閲者那珂通世)を参照。正文第122頁、大日本図書株式会社発行、明治31年(1898年)3月31日出版。日本国立国会図書館に収蔵。

たとおりである。『東洋史要』でこの史実が記述されているのは、近古期第六篇「明の中期と末期」の第三章「倭寇と朝鮮の役」である。桑原氏は、「明の中期と末期」の篇で主に明と韃靼・日本・朝鮮の関係を記述した上、日本は 2 度も朝鮮に攻め込み、明朝は援兵を送り、最後に豊臣秀吉の死で進攻は止まったが、明朝と朝鮮の国力が大いに損なわれたという史実を第一人称で述べている[20]。この詩から、明朝の滅亡と清朝の興起を書く際、王国維は明と清自身の衰微・発展を議論するのではなく、日本および朝鮮との関係に着眼したことが分かる。豊臣秀吉に対する「蓋世雄」というその呼称も意味深長であり、その鮮明な歴史観を表している。

第十三・十四・十五・十六首では、曹操や桓温、北朝将士、李淵に対する感情や視点も一致するところがある。元朝が漢族王朝ではないことを気にしないように、王国維は、曹操の狡猾と桓温の称帝の野心をも気にせず、動乱の国家を統一し、社会情勢を安定させた功績に注目している。第十六首の詩で、形勢が不利の時には一旦忍従して匈奴に頭を下げ、力を蓄えてから反撃に出るという唐太宗の策略に賛同する意を表した。これは王国維が晩清に期待している所であろう。

この詩集で、第十八首の「五國風霜慘不支，崖山波浪浩無涯。當年國勢陵遲甚，争(手写本為“莫”)怪諸賢説(手写本為“唱”)攘夷。」は特色を持つ。手写本では、この詩にあった「争」の字が「莫」に変えられ、「説」の字が「唱」に変えられた。詩の内容は、宋徽宗と宋欽宗が捕虜となって宋朝が滅亡したことだが、その視点は、依然として「攘夷」という対外関係の話題にある。前述のように、この詩集は、強大な国力や、周辺民族や国との友好関係が保たれたことへの賛美に重きを置いている筈だが。この詩だけが非常に特殊であり、詩集の中で、国が滅亡する時に他民族に対する態度について述べた唯一の詩である。この情況は、当時の清朝が直面している情況とよく似ている。この詩の前後の改変からも、当時の清朝の対外関係に対する思慮や探索、疑問という王国維の態度が分かる。王国維はこの事について、1900 年に高嘯桐に送った書簡で、この詩に対する注釈を書いていた。注釈の中で、「国勢が弱まるほど外人を嫌うと言えよう。宋人は非常に外人を嫌う。漢・唐・元が強盛の時にそうではなかった。国朝は嘉慶帝・道光帝の後から外人を嫌い始めた。康熙帝の時にはそうではなかった。」[21]と記している。この注釈で王国維は、自身の国勢が弱まるほど外国の人や物を排斥する。清朝は嘉慶帝・道光帝の後から対外的に排斥し始めたと指摘している。宋朝の国勢が弱まっていた時に、多くの学者は頑なに「攘夷」を主張した。この「攘夷」に対し、初稿の中にはっきりと風刺の意が込められている。即ち、自分の国を改善し強くすることを考えず、国勢の衰えた原因が外国人の所為とばかり考えて「攘夷」を唱えた輩や、明と清の自閉により外国や外国人との疎通が疎かになったことで、近代科学や学術に

---

[20] 同上、下巻正文第 145-146 頁。

[21] 王国維：『詠史二十首』、『王国維全集』第十四册、広東教育出版社 浙江教育出版社、2009 年 12 月出版、第 620 頁。

おいて遅れをとったという後世への悪影響を風刺していたのだ。だが、1900年4月の手書き原稿の中、作者が初稿にあった「当年国勢陵遅甚，争怪諸賢説攘夷」を「当年国勢陵遅甚，莫怪諸賢唱攘夷」と2文字を書き換えたことで、その非常に微妙な態度の変化が覗える。これは、王国維の「攘夷」説に対する態度の変化と躊躇いをも表している。1900年4月になって、義和団が山東地方に起こり、次第に洋人の教会を破壊したり、宣教師を殺害したりする事件を起こした上、清政府に対し外国軍への宣戦を要求した。慈禧は光緒帝がリードする変法運動を妨害し、西洋の思想や学術を敵視し、強盛国家への復興を諦めた一方、国内外の様々な問題や武力侵入に対抗することができなかった。このような情勢は、南宋の時と極めて似ていた。改変後の詩には、風刺の意がなくなり無力感が漂っている。これは、王国維の「攘夷」説に対する矛盾の気持ちでもある。彼は、清政府に漢唐のように強盛になり、内乱と外辱から抜け出してほしいと真剣に願っているが、今の国勢が衰えていることもよく認識しているため、李世民に習い、ひとまず恥を忍び、自身が強くなることを急務とし、それから外来勢力に対抗することを図ると主張したのだ。

日清戦争以降、清政府の弱さと周辺国家の強さがいっそう際立つようになった。敵に劣る形勢において、如何に外国と交渉し、各国の間でどのような状態を維持すべきだろうか？『詠史二十首』はこの疑問を持つ作者にとって、歴史の中から答えを捜す道のりでもある。そこで、『東洋史要』にある詳細で専門的な対外交渉と対外交流の内容は、彼にまとめて論議する可能性をもたらした。長い歴史と複雑な事件に対し、王国維の二十首の詠史詩は、視点とテーマの選択、、歴史的観点、特に対外関係の史実記述において、ほぼ『東洋史要』の枠組みに遵っている。王国維は『東洋史要』の啓発により、創作の閃きを得たのだが、この詩集が歴史の事実を通じて表した対外関係に対する注目と主張は、当時の国家情勢に対する彼の関心と憂慮をも表しているゆえに、当時の情況において、どんな対外姿勢を取るか考え模索することこそ、この詠史詩を創作した深層的原因である。

2.「種族起源」という具体的な問題に対する注目

王国維の『詠史二十首』は、歴史的事件を見る視角や、歴史テーマの選択において『東洋史要』の影響を受けたのみならず、一部の具体的問題に対する注目もその影響を受けている。例えば、詠史詩の第一首は、桑原隲藏の影響を受けて、同じように『東洋史要』の前書きで解析された種族の移動問題をテーマにした上、具体的観点においてもその影響を受けたが、時の流れと学術の進歩に伴い、1900年の訂正原稿を読めば、明らかに他の学説の影響をも受けていたことが分かる。それでも、王国維がこの問題に注目するようになったきっかけは『中等東洋史』(『東洋史要』)である。

桑原隲藏は『中等東洋史』(『東洋史要』)の前書きで、「漢族は東亜歴史において非常に重要的な人種で、中国大部の地域に分布している。遠古の時代に、西から中国の内地に移り、黄河の両岸に住み着いたと思われる。のち、四周へ蔓延して生息地を広げ、東亜文化の創始者である。」

[22]と漢族人種の西来を分析している。更に、この書の第一篇「周以前」の第一章「太古の時代」の冒頭で、「漢族は遥か昔の時代に、北西から中国の内部地域に移動したと思われる。」[23]と述べた。詠史詩の第一首である「回首西陲勢渺茫，東遷種族幾星霜？何當踏破雙芒屐，卻向崑崙望故郷。」(手写本で「西陲」は「伊蘭」に、「東遷」は「西来」に、「卻向」は「却上」に書き改められた)は、華夏種族が長い歳月を経て東へ遷移したことに対する賛美をテーマにしている。二十首の詠史詩の始まりは、それと同様に、華夏種族の西来問題から着手した。漢族人種は西から黄河流域に遷移したと記述する桑原隲藏の影響を受け、崑崙山が人類発祥の地という古史にあった神話を合わせて考えた王国維は、漢族の発祥地は中亜の西陲にある崑崙山の周辺だと考えた。それに基づき、『学衡』誌では「回首西陲」や「却向崑崙望故郷」といった表現があった。

孫江氏の論文「拉克伯里“中国文明西来説”在東亜的伝布与文本之比較」に基づくと[24]、英国学者 Lacouperie は 1894 年に中国人種は古代のバビロンから起源するという説を唱え、バビロン遺跡とアジアに関する西洋古史を、中国の古史や伝説と融合して、中国文明西来説を唱える本を出版した。この本は西洋においてさほど注目を浴びなかったが、僅かの間に日本で白鳥庫吉・林泰輔・桑原隲藏といった有名な史学者達による激しい論争を引き起こし、更に日本で「尭舜禹抹殺論」を、中国で「疑古思潮」を起こした起因の一つとなった。孫江氏のこの論文によると、桑原隲藏は華夏文明は古代バビロンから由来するという Lacouperie の説を認めていなかったが、『中等東洋史』(『東洋史要』)におけるその曖昧な語りは、桑原隲藏は「人種西来説」の賛成派だと大半の読者を誤解させるには十分だった。それは、当時日本の著名な史学者である白鳥庫吉までも Lacouperie の観点を一部認めていたからである。Lacouperie の学説は、1900 年頃に日本人学者により中国に伝えられ、中国の学術界においても幅広い反響と論議を引き起こした[25]。上述のように、『学衡』誌で掲載された王国維の詠史詩第一首に、「回首西陲」や「東遷種族」、「向崑崙望故郷」といった表現はあったが、1900 年 4 月(庚子年の三月)の手書き原稿で、その表現は「回首伊蘭」(伊蘭とは、イラン高原のことで、ペルシャ帝国の所在地だった。当時日本語で「伊蘭」と訳されていた)や「西来種族」、「却上崑崙望故郷」に書き変えられた。詩に出るイラン高原

---

[22]筆者の訳文。(日)『中等東洋史』上冊(筆者桑原隲藏、校閲者那珂通世)、正文第 14-15 頁、大日本図書株式会社発行、明治 31 年(1898 年)3 月 31 日出版。日本国立国会図書館に収蔵。原文は、「漢族東洋史上尤重要な人種にして大抵支那本部を占領する。此族は盖悠遠なる時代に於て、西方より支那内地に移住し来りて、黄河の沿岸に棲息し、次第に四方に藩殖せし者に似たり、古来東方亜細亜の文化の木鐸となりしは、實に此族なり。」である。

[23] 同上、正文第 23 頁、大日本図書株式会社発行、明治 31 年(1898 年)3 月 31 日出版。日本国立国会図書館に収蔵。

[24] 孫江「拉克伯里“中国文明西来説”在東亜的伝布与文本之比較」、『歴史研究』2010 年第 1 期、116-137 頁。

[25]中国と日本における「中国文化西来説」の伝播と影響の詳しい様子については、前注の孫江論文参照。

は、正しく古代バビロン人が東へ移動する際、最初に通った所である。しかも、彼は種族の「西来」を強調し、その遠望する故郷も崑崙山脈ではなくなり、崑崙山はそこに登って更に西を遠望する所となる。こうした改変から、王国維の華夏種族の発祥地に対する認識が変わったことを明確に知ることができる。この時の彼が認識している華夏種族の発祥地は、更に西の方向へ移動した。内容変更の前後を見比べて、王国維も、幅広い反響を起こした上述の「バビロン起源説」の影響を受けていたことが分かる。

以上のように、全体性を強調するという桑原隲藏の『中等東洋史』(『東洋史要』)の観点の影響を受けた王国維は、より広い視野で根源から中国と外国の関係を見つめるようになり、華夏種族の西来に関する論議と感慨を第一首の詩に綴ったことが分かる。1900年4月の手書き原稿にあった内容変更には、Lacouperieの「バビロン起源説」の影響を受けた痕跡も見えるが、この問題に注目するようになったきっかけは『中等東洋史』(『東洋史要』)である。

総じて言えば、桑原隲藏の『中等東洋史』(『東洋史要』)は、新しい視点と方法で、中国とその周辺諸民族や国の歴史を記述した東亜初の著作として、藤田豊八の紹介によって最初に東文学社で使われた。王国維の『詠史二十首』は、創作の動機や全体的歴史観、テーマの選択、具体的内容などにおいて、いずれも主としてその影響を受けていた。詩の中で、他の流行の学説と観点が取り入れられた痕跡も見えるが、それはただ細かい部分の観点であり、全体における『東洋史要』との内在的関連性は明白である。だが、上述のように、『東洋史要』の影響と刺激を受けた一方、王国維の国の現状に対する関心と心配や、その情況における対外姿勢についての模索と思慮もまた、この詠史詩集を創作した深層的原因であることは否定できない。

そして、更に考察して見ると、王国維と桑原隲藏の『中等東洋史』の繋がりは、『詠史二十首』と初翻訳本『東洋史要』の繋がりだけではないことが分かる。1908年に商務印書館により『重訳考訂東洋史要』という中学教科書が発行された。この本の体裁は、まったく桑原隲藏の『中等東洋史』の枠組みに従っている。具体的内容について多少の増減はあったものの、歴史的観点について大きな変動がなく、逆にその中の不足の所を補充したり、改訂したりした上、考訂内容を大量に増やしている。翻訳者と考訂者として「山陰金為」と署名されたこの『重訳考訂東洋史要』も樊炳清と王国維の作品に違いない。

三、樊炳清・王国維と『重訳考訂東洋史要』

前述のように、桑原隲藏の『中等東洋史』は、東文学社の生徒で、王国維のクラスメイトである樊炳清(浙江山陰出身)によって翻訳され、光緒二十五年四月八日(1899年5月17日)に東文学社によって発行され、中文の書名は『東洋史要』である。王国維は藤田豊八の指導の下、この本の序文を書いた。『東洋史要』は完全に桑原隲藏の原作に則って翻訳され、王国維は序言でこの本の系統性と科学性を大いに称賛した。東文学社の宣伝もあって、1899年に発売してから好調な売れ行きを示した『東洋史要』は、多くの新式学堂で歴史教科書として使われ始めたため、中

国で大いに広められ、東文学社の初出版の後、多くの複製版が出た。日本の学者も中国における『中等東洋史』の伝播を大変注目している[26]。その後、市村瓚次郎の『支那史要』など、日本人作者の書いた中国歴史類の教科書が中国で流行し始め、日本出版の教科書は人気が高いと見た一部の出版社は、他の学科の教科書の編集に日本人を雇い始めた。この現象に不満を感じた急進派の章太炎や梁啓超は、中国の歴史でありながら編纂を日本人に任せるのは怪しからんと考えた。実際、後の 1920 年代に、この二人とも中国人の自力による新式の歴史教科書の編纂を志していたが、結局、完全実現まで至らなかった。1902 年、梁啓超は『三十自述』の中で、「一年以来，頗竭棉薄，欲草一《中国通史》以助愛国思想之発達，然荏苒日月，至今猶未能成十之二。」[27]と語っていた。『中国通史』を書こうとする章太炎は、初期に「百巻之書，字数不過六七十万，或尚不及，尽力為之，一年必可告竣」[28]と計画していたが、結局、完成できずに『中国通史略例』という文章だけが残された。『支那通史』が再発行された 1899 年、すでに日本人編纂の中国歴史の教科書を使うことについて反対していた東文学社は、「支那通史序」で、「嗚呼！以吾国之史，吾人不能做，而它人作之是可耻也。不耻不能作而耻読他人所作之書，其為可耻，孰過是也。」[29]と語っていた。「支那通史序」は、王国維が羅振玉に代わって書いたものだと公認されている。この序文から、若き王国維は、新しい学術を導入することにおいて、政治的や社会的要素に影響されずに、「学術独立」の考えを貫いていたことが分かる。

外国人編纂の教科書が流行しているという現象について、1905 年に設立されたばかりの清朝学部も目を光らせた。全国的に教材の規範化を図る学部は、更に、国外の教育類書物の翻訳や、本国教材の編纂、社会全体の教科書に対する審査と規範を役割とする編訳図書局を創立し、国内に流行の様々な教科書に対する審査と選り抜きを行い始めた。桑原隲藏の『中等東洋史』は、その良好な売れ行きと科学性をもって学部の審査を通過し、政府認定の教科書として使われることになった(那珂通世の『支那通史』と市村瓚次郎の『東洋史要』も同時に審査を通った)。中国ではこの本の翻訳版は数多く存在したが、体裁と内容が最も完成されたのは、商務印書館が 1908 年の始めに出版した『重訳考訂東洋史要』である。この本は、当時中等学校の教科書として使用されはじめてから一年に満たないうちに 4 版も発行され、前後合わせて計 11 版発行されたことから、その売れ行きの良さと影響の大きさが分かる。

---

[26] 例として、「日本における東洋史の成立」『東アジア交流と経典詮釈』(筆者関西大学藤田高夫)、第 19-33 頁、2009 年 3 月。「清末における「東洋史」教材の漢訳−桑原隲藏著述「東洋史」漢訳教材の考察」・広島大学「史学研究」(著者広島大学鈴木正宏)、第 250 号、2005 年。

[27]梁啓超『三十自述』・『飲氷室合集』第十一冊第 19 頁、中華書局 1989 年版。

[28]章太炎)『梁啓超への手紙 (1902 年 7 月)』、『章太炎政論選集-上冊』(編集者湯志鈞)、中華書局 1977 年版、第 168 頁。

[29]『支那通史』(筆者那珂通世/序文羅振玉/発行元東文学社/翻訳者格致学堂)、第 1 冊第 1-3 頁、光緒二十五年四月八日。

『重訳考訂東洋史要』では、正文の前にかなり長文の「凡例」が付け加えられた。凡例は翻訳者兼考訂者が自ら書き綴ったものであった。著作権ページには訳述者と発行元の 2 項目しか載っていない。これによって、この本の企画編集は商務印書館であるという可能性が消え、翻訳者兼考訂者の「山陰金為」が自ら編集して完成させたことが明らかになる。金為は、この本の凡例には「一 是編拟命名重訳考訂東洋史要，考訂云者，謂考其異同，訂其疏舛也。」[30]と語り、原本にある間違いや漏れた箇所を訂正し、補充すると公言している。例として、原本にある「唐太宗征高麗、大敗而還、宋神宗計略外国之策全失敗」の件に対し、金為はこの説を「有涉誣妄」だと考えている。また、原本には「西突厥は達頭可汗から始まった」と記述されていたが、翻訳者は、「隋唐の史書に、いずれも阿波可汗から始まったと書いてある」と指摘する。このような訂正すべき箇所は原本から多く見付かったため、翻訳者のこの本に対する考訂はかなり入念であり、その歴史学の基本も大変しっかりしていることが分かる。そこで連想するのは、王国維が「東洋史要序」で、すでに「この本には多少の間違いがある」と指摘していたである。更に、凡例に「一 近時新出諸書，当桑原君原書出版時，大都猶未発現，故其中所載事実多未経采録，是編皆擇要補入，亦欲使購閲者，得此一書，抵够群書之用而。」[31]と記している。これは、近年の新書の一部は桑原隲藏の『中等東洋史』(『東洋史要』)が出版された時に、まだ読者の目に留まっていなかったため、その中に記述されている新しい言論の多くは書物に使われていないので、翻訳者はこれ等の新しい知識と観点を『重訳考訂東洋史要』に追加すれば、この 1 冊の本から、群書の観点を知ることができるという意味である。 そして、「是編之成先後所調査搜辑中外諸書，不下数十百種，参互考訂、別擇棄取，頗費苦心。」「凡本書所載中外各国、其古今疆域之沿革，与其名人勝迹偉業、皆附刊読史地図，兼插图画，以備参考，而資感発。」[32]とも語った。ここから、翻訳者は百冊以上の中外書物を参考に内容の増減と考訂を行っただけでなく、京師大学堂によって検定された地図を何枚も追加し、本の内容に関係する地図を何枚も作成して、読者の参考になり、この本から閃きが得られるように努力していることが分かる。

『重訳考訂東洋史要』の正文には、前述した仏出身の英国学者 Lacouperie の学説も記述されている。例えば、前の節で述べた「種族西来」の内容に付け加えた考訂の具体的内容は次の通りである。「漢族。東洋史中尤重要之人種也。大抵据有中国本部。此族蓋似于邃古時，从西方移居中国内地。栖止于黄河両岸。寝假藩殖于四方。古来播東亜文化先声者。※例：東亜歴史書を書き図を添えたい某独国人は、私に上古の事について質問し、黄色人種はバビロンの北西から参り、ずっと川を沿って下り、蜀まで行き着いたと返事したところ、彼は区別として図に緑色をつけた。」[33]ここから、金為は、黄色人種の祖先は西のバビロンから来ているという Lacouperie の学

---

[30] 本は同上、凡例第 1-3 頁。

[31] 同上。

[32] 同上。

[33]中学堂教科書『東洋史要』(筆者桑原隲藏(日)・再翻訳者山陰金為)巻一、上古期・総論第一篇第 6

説を考訂で紹介したことが分かる。また、正文で遠古のある期日を記述した時、考訂として付け加えられた内容には、「巴比倫有十計算法，以計大洪水以前諸王之年数与此同。説出西人拉克伯里所著之《支那太古文明西元論》，以千八百九十四年出版，其所引皆与中史相合者因得窺。漢族今尚無移訳者，下注多本此。」[34]と Lacouperie の著書『支那太古文明西元論』が明確に書き記される。他にも、正文で伏羲が八卦を作ったことについて、考訂にも、伏羲の八卦はバビロンの楔形文字から変化してきたという Lacouperie の観点が記述されている。孫江氏の「拉克伯里“中国文明西来説”在東亜的伝布与文本之比較」[35]の統計データによると、Lacouperie の著書名は中国の新聞や公開の言論で異なる呼び名があり、『重訳考訂東洋史要』での『支那太古文明西元論』という書名は、1903 年頃に梁啓超が日本で編集長を務めていた『新民叢報』[36]から取ったものである[37]。凡例で記述されたように、Lacouperie の学説は、中日両国で大反響を起こしたものの、最後まで完全に漢文に翻訳されることなく、その一部の章節だけ日本を経由して中国に伝来され、一部の政治的目的のために、中国の学者達によってさまざまに演繹され、新しい意味を与えられた。それでも、前記のこの本に対する翻訳者の通暁した程度を、凡例で記述された「是編之成先後所調査搜辑中外諸書，不下数十百種」と合わせて考えれば、彼が参考にしたのは 1894 年出版されは英文版の原本だろうと推測できる。

以上の凡例と一部の正文だけの検討からでも、金為という人物が、図書を編訳する専門職でなければ、これほどの専門的技能を身につけているはずがなく、これほどの様々な地図を使用し作成することのできる能力を有する筈もない、ということが推測できる。そして、彼は東西の学問を兼ね備え、英語にも日本語にも通じる学者でもある。でそうでなければ、百冊以上の中外書物を同時に使って、内容の増減と考訂を行うことはできない筈である。日本語翻訳のことだけを考えた場合、当時の中国では、一部の文人は、日本語なら習わなくても自力で翻訳することができると考えていた。実際、文書の一字一句を忠実に翻訳することのできる者達は、いずれも日本語を専門的に勉強していた筈で、その様な者によって翻訳されたものは、政府指定の教材となりえた。それは、豊かな経験を持つ翻訳者の証でもある。当時、日本語の翻訳ができて、編集の仕事もできて、百冊以上の中外書物を使い、桑原隲藏の原作に対する詳細の考訂を行うこ

頁、上海商務印書館発行、光緒 34 年(1908 年)2 月に初版、宣統元年(1908 年)12 月に第四版、正文第 6 頁。

[34]中学堂教科書『東洋史要』(筆者桑原隲藏(日)・再翻訳者山陰金為)巻一、上古期・総論第一篇第 6 頁、上海商務印書館発行、光緒 34 年(1908 年)2 月に初版、宣統元年(1908 年)12 月に第四版、正文第 12 頁。

[35] 孫江「拉克伯里“中国文明西来説”在東亜的伝布与文本之比較」

[36] 『新民叢報』は、梁啓超が戊戌政変のため日本に逃れた後、1902 年に創立した新聞社で、主に西学を伝播していた。

[37] Lacouperie の著書の中国名に関する紹介表、孫江の『拉克伯里“中国文明西来说”在东亚的传布与文本之比较』をご参照ください。『歴史研究』2010 年第 1 期、第 130 頁。

とができて、原作の間違った箇所を訂正することのできる学者「山陰 金為」は、まだ無名のままだった。

晩清と民国の学者を調べ尽くしても、「金為」という名前が出てきた回数は数えるほどにすぎない。この本の翻訳者を務めた以外、「金為」という名前は、中国の学界が外国の小説を出版するために書いた献辞の中に数回現われただけだった。これらの献辞の体裁の多くは古詩になっている。例えば、漢文に翻訳した蘇德蒙の小説『売国奴』(1905)を紹介する献辞である「浮生会了国殤中，馬革輿尸作鬼雄。佳耦不偕同命鳥，男儿元是可怜虫。荆天棘地皆奇福，粉骨糜躯実令終。安得人人有是子，庸奴売国可心恫？」[38]、あるいは漢文に翻訳した『玉雪留痕』(1905)の献辞である「瘴花蛮草，蓦仙仙吹落，霊風夢雨。無限情根芟不尽，随処茁芽抽縷，箐密黏天，蓮香出水，春去誰為主？笑渠摩勒，惺惺変還恋眉妩。難得紅泪朝冰，灰心晩烬，老病猶能武。骨肉煩寃連肺腑，索借恩仇血補。駆牡従狼，搜神罵鬼，渾把頭颅賭。填胸块塁，探喉凭稗官吐。」[39]から、この人物は英語と日本語に精通し、日本と西洋の新しい歴史書に興味を持つだけでなく、詩・詞にも長けていることが分かる。上述した 2 首の献辞は、「晩清文学叢抄」という資料集から引用されたものである。この資料集を読むと、林紓・柳亜子・王国維・厳復といった学界では大変有名で、編集と翻訳において豊かな経験を持つ者ばかりである。ここにしばしば出てくる一つの名前が、「山陰 金為」である。上述の翻訳家達と同様に、新しく翻訳された小説を宣伝しょうとする出版社に招待されるほどだから、きっとこの人物も高い翻訳水準と豊かな経験を有し、当時の学界に認められていたに違いない。このように、「山陰 金為」は上述の様々な能力を持ち、古詩の創作も得意であり、編訳業界のエリートでもあることが分かる。そして、上述した条件と可能性を総じて考えれば、「山陰 金為」は「山陰 樊炳清」であるに違いない。

樊炳清は王国維と同様、日本語を習ったことがあり、英語に精通する上、社交辞令にも長け、王国維と詩詞について切磋琢磨していた。しかも、王国維に頼まれてその原稿『人間詞』の序文も作っている。樊炳清の息子は羅振玉の初孫娘羅瑜と夫婦の縁を結び、羅家と樊家の関係は非常に親密である。英語と日本語、詩詞に精通する樊炳清だが、言動がとても控え目で、発表する作品によく偽名を使っていたとその後人が語る。浙江省山陰県出身の樊炳清は官職がないため、「山陰 樊炳清」や「山陰 樊志厚」といった様に、署名の時にいつも出身地を付け加えていた。また、あまり署名を気にしないという癖のある樊炳清は東文学社に入ってから、図書の翻訳でも、雑誌の編集でも筆名をたくさん使っていた。かつて王国維と一緒に『教育雑誌』を編集していた時から、しばしば署名なき作品を発表していた。王と一緒に『教育世界』を編集し、樊炳清が一人で文学版面の編訳を担当していたにもかかわらず、その中で樊炳清の署名がある文章は殆ど

---

[38] 中国都市芸能研究会サイト、晩清民国叢抄/『売国奴』の献辞。
https://wagang.econ.hc.keio.ac.jp/~chengyan/index.php?%E6%99%A9%E6%B8%85%E6%96%87%E5%AD%B8%E5%8F%A2%E9%88%94

[39] 中国都市芸能研究会サイト、晩清民国叢抄/『玉雪留痕』の献辞。サイトアドレスは同上。

見当たらない。王国維の『人間詞甲稿』と『人間詞乙稿』のために、序文を作る時だけ「山陰 樊志厚」と署名した。このため、最初この二篇の序文は樊炳清の署名を偽った王国維の作品と多くの学者に思われていた。彼は言動と学問において如何に控え目であることが分かる。羅振玉は幾度も、王国維・樊炳清・瀋紘は東文学社の優等生だと褒めていた。辛亥革命の前に、学部の編訳部に入るまで、ずっと羅振玉と藤田豊八について各地へ赴任し回っていたのは、王と樊だけだった。辛亥革命の後、張元済はわざわざ樊炳清を高級編集として商務印書館に招いた。張元済は樊炳清の編訳と翻訳の能力をよく知っていたからであろう。殆どの作品は本名で発表しないという樊炳清の癖から見ると、『重訳考訂東洋史要』に「山陰 金為」の署名を使って出版するのも理解に苦しむことはなかろう。

前述のように、王国維と樊炳清は、1907 年に羅振玉と藤田豊八に付き従って清朝学部の図書編訳局に入り、辛亥革命が勃発するまで、教科書の編修や外国参考書の翻訳といった業務を担当していた。清朝学部の図書編訳局の下で、多くの教科書が編修され、外国語図書も大量に翻訳された。学部にいる期間中、英国百科全書の中の『欧洲大学小史』や『世界図書館小史』、米国教育省の教育報告書『幼稚園の原理について』や『仏国の小学制度』といった王国維の翻訳した本や文章の大半は、王国維と署名して学部の官報に連載されていた。在職期間中、彼は更に『心理学』（1907 年 8 月）、『弁論学』（1908 年）を翻訳し、いずれも商務印書館により発行された。商務印書館の責任者である張元済は、かつて学部の官員でもあった。のち、学部内部の新旧勢力の闘争が激しかったため、辞職して商務印書館に投資し、中国の新しい学制に対応する教科書の企画・編纂・発行・普及に尽力した。このことから、商務印書館と図書編訳局の関係は非常に親密であることが分かる。『重訳考訂東洋史要』は、ちょうど王国維と樊炳清が共に学部の図書編訳局に勤務していた頃に発行された。かつて図書編訳局の局長を務めた袁嘉谷が、学部における編集の様子を思い返した時、主に思い出すのは樊炳清・劉大紳・王国維・羅振玉・厳復の五人だった。当時、学部に務めている職員は多かったが、外国語に精通する者が少なかったため、編訳業務の多くは樊炳清や王国維、厳復といった編訳の経験が豊かの人の身にのしかかっていた。前述したように、学部の審査を通った桑原隲藏の『中等東洋史』（『東洋史要』）は、中国の教科書の基準になる日本人の著作の一つである。樊炳清が初回に翻訳した『東洋史要』は、売れ行きが良く科学的である一方、当時その翻訳者であった樊炳清と序文を書いた王国維は、ちょうど教科書の編訳を担当しているため、図書編訳局がこの本を再編訳しようと考えた時に、事は難なく進めることができただろう。そして、その編訳業務の殆どは、自ずと樊・王が担当することになった。初回の翻訳を務めた樊炳清は、より多くの心血をこの本に注いでいたに違いない。一方の王国維は、西洋の歴史編纂物を参考に中国の古史を考訂することにおいて樊炳清の力になれたと思われる。王国維は、『詠史二十首』を改訂する 1900 年に、既に Lacouperie の著書の影響を受けていた。そして、『重訳考訂東洋史要』の注釈の多くは、正しく中国で全書の翻訳が行われていない Lacouperie の著書『支那太古文明西元論』から来るものである。詩の中には

「銅頭鉄額今安在」という句があり、この「銅頭鉄額」は蚩尤のことを指す。同様に、『重訳考訂東洋史要』の中で、蚩尤に対する表現も「蚩尤は銅の頭と鉄の額を有し砂利を食す」の一句だけで、桑原隲藏の原作にあった言葉ではない。銅の頭と鉄の額は蚩尤のイメージではあるが、この言葉は蚩尤に最も使われているものの、専用のものではない。偶然でなければ、両者は影響しあうか、同一人物によって創られたという関係にある。図書編訳局の職員である王国維が『重訳考訂東洋史要』の業務に参与するのは当然のことではあるが、この内容も一つの証拠として認められるだろう。

しかし、『重考訂東洋史要』に政府指定教科書という立場があり、『中等東洋史』の初翻訳本『東洋史要』と異なるため、内容は全て原本に則る訳にはいかない。しかも、この時の樊炳清と王国維は、既に清朝学部・図書編訳局の官員という身分に変わっていた。更に、ここ数年で歴史学界に新たな動きもあって、原本の内容に対し多少の増減と改訂を行うことで、いっそう正確さと完璧さを求めると同時に、清政府が編集した歴史教科書という立場も守らなければならない。これも、『重訳考訂東洋史要』は『東洋史要』のように、全て原著通りに翻訳する訳にはいかない必然的な原因である。日本人学者鈴木正弘の「清末における「東洋史」教材の漢訳–桑原隲藏著述「東洋史」漢訳教材の考察」[40]によれば、『重訳考訂東洋史要』と『東洋史要』と主に異なる所は次の通りである。1.『重訳考訂東洋史要』は、歴朝の中国皇帝の年号と年代を使い、日本暦と西暦を使わない。2.日本の琉球に対する動きと琉球問題における中日の関係についての詳しい叙述。3.清朝を「大清」と称する。4.台湾の原住民による琉球人と日本人殺害事件について、『重訳考訂東洋史要』では「清廷は生番のその属民非ざるを公言し」という『東洋史要』の記述を、「廷議は甚だ主権に注意せずして、答えるに台湾の生番を以て、もと外化の民と為し」という慎重的なものに変える。更に、『重訳考訂東洋史要』では、西郷従道の台湾遠征を「生番を殺戮し」と称し、清朝側の対応を「廷議は生番愚蠢と雖も本版図に隷するを以て、逼りて日をして撤兵せしめ」[41]と記述した。鈴木氏のまとめた内容から見ると、『重訳考訂東洋史要』は完全に政府認定教科書という立場を取り、原本の一部内容を改訂していた。樊、王の身分が東文学社の生徒から清学部の図書編訳官員へと変化し、更に政府認定教科書という立場もあって、前後両書の内容に違いが生じたのも当然のことである。二人の学部での職務に緊密な関係があるため、図書編訳局の支持が得られた。王国維は樊炳清に協力して『重訳考訂東洋史要』を完成させたというのは、現在のところ最も合理的な解釈である。

---

[40] 鈴木正弘「清末における「東洋史」教材の漢訳――桑原隲藏著述「東洋史」漢訳教材の考察」、広島大学「史学研究」第250号、2005年。

[41] 同上、第29頁。

この件は中学堂教科書『東洋史要』(筆者桑原隲藏(日)・再翻訳者山陰金為)巻一、上古期・総論第一篇第6頁、上海商務印書館発行、光緒34年(1908年)2月に初版、宣統元年(1908年)12月に第四版、正文第98頁から引用したもの。

以上のように、王国維の『詠史二十首』と、日本の史学者桑原隲藏の『中等東洋史』（『東洋史要』）とは、創作のきっかけや詠史の視点、テーマの選択、具体的内容という全体において内在的関連がある。また、その中で一部の具体的観点と内容に、当時流行した「中華文明のバビロン起源説」と「進化論」の観点の影響を受けた痕迹があった。だが、その創作のきっかけは、*庚子*事*変*前夜の国勢の衰退、列強の分割に対する深い憂慮と、危機に直面する時の対外関係についての思慮である。王国維の作品で、桑原隲藏の『中等東洋史』から影響を受けたのは『詠史二十首』だけではない。この本の 1908 年の再翻訳版『重訳考訂東洋史要』の編訳者について考察した結果、この本の編訳者は清朝学部に勤めていた樊炳清であり、王国維の協力を得ていたことが明らかになった。更に、王国維の清朝学部における勤務期間中の具体的な様子や、王国維が羅振玉、藤田豊八、樊炳清との交流の具体的な様子を一部知ることができた。そして、王国維の学術における道のりと合わせて考えると、日本へ赴く前の王国維は歴史学の研究に従事したことはないとはいえ、常に史学界の動きと学術の進展に注目していることが分かる。これは、彼が日本に行った後、すぐに歴史の研究に転向することができ、国学の大家となることができた要因の一つである。

『或問』投稿規定

- 投稿資格は、近代東西言語文化接触研究会会員（入会は内田、又は沈まで）。
- 投稿論文は、原則として未公開の完全原稿とし、電子テキストとプリントアウトの両方を提出する。原稿は返却しない。
- 執筆者による校正は、二校までとする。
- 投稿論文は、本誌掲載後、他の論文集等の出版物への投稿を妨げない。
- 原稿作成に当たって、『或問』「執筆要領」を厳守する。
- 原稿料は支払わないが、雑誌を格安価格で提供する。

『或問』執筆要領

1. 使用言語は、日本語、英語、中国語とする。
2. 字数は、16,000 字（400 字詰め原稿用紙 40 枚）までとする。
3. 簡単な要旨（原稿と異なる言語による）を付する。
4. 投稿は、所定のフォーマットを用い、表などは極力避ける。フォーマットは、沈国威までご連絡ください。
5. テンプレートを使用しない場合、テキストファイルの形で提出する。
6. 論文中に中国語などを混在させる場合、Windows は、微軟 PINYIN2.0（簡体字）、微軟新注音（繁体字）を用いること。
7. 注は、脚注を用い、文章の行中に（注 1）のように番号を付ける。
8. 参考文献は、下記の体裁で脚注に付けるか、或いは文末に一括して明示すること。

（単行本）

或問太郎、『西学東漸の研究』，大阪：しずみ書房，2000 年 10-20 頁

Bennett, Adrian A. *John Fryer: The Introduction of Western Science and Technology into Nineteenth-century China.* Cambridge, Mass.: Harvard University Press 1967.

（論文）

或問花子、「東学西漸の研究」，『或問』第 1 号，2000 年 2-15 頁

Fryer, John. “Scientific Terminology: Present Discrepancies and Means of Securing Uniformity.” *Records of the General Conference of the Protestant Missionaries of China Held at Shanghai, May 7-20, 1890*, pp. 531-549.

9. 本文や注の中で、文献に言及するときには、或問太郎（2000:2-15）のように指示する。同一著者による同年の論著は、2000a、2000b のように区別する。

内田慶市（u_keiichi@mac.com）
沈　国威（shkky@kansai-u.ac.jp）